

平成24年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

世界史必履修となっている高等学校地理歴史科の教育課程において、科目構成や履修形態を改め、教科の趣旨やねらいを踏まえた新しい必履修総合科目を設置し、その学習の内容と方法についての研究開発を行う。

2 研究の概要

地理歴史科を構成する世界史、日本史、地理の3分野からなる新しい総合科目「世界の風土と文化」を必履修科目として設置し、地理歴史科の趣旨やねらいを踏まえて学力の一層の充実を図る。具体的には、①世界史必履修に代わる新科目を教育課程上に設置するとともに、地理歴史科の科目構成や履修形態を検討すること、②新科目の学習の内容や方法について研究し、単元構成や年間指導計画を作成すること、③新科目を本校教育課程上に位置づけ、これを実施し評価のあり方や実施上の課題について検討すること、などに取り組む。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

世界史必履修をベースにした地理歴史科の科目構成は、平成元年の学習指導要領改訂以来、学校における履修のあり方にさまざまな課題が指摘されている。地域に生起する諸事象の多くは、地理的事象と歴史的事象からなり、世界史、日本史、地理のうちの1領域を必履修とした学習指導要領では、我が国をはじめ、世界の諸地域の伝統や文化を適切に理解しこれを尊重する態度を養うことは困難である。地理的事象と歴史的事象とを相互に深く関連させることにより、生活・文化の地域的特色を適切に理解し、地理歴史科のねらいを踏まえた指導を一層充実したものにすることができる。

地理歴史科に共通必履修となる総合科目を教育課程上に新たに置くことにより、次のような効果が期待できる。

ア 地理歴史科のねらいを踏まえた基礎基本の定着により、知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等を身に付けさせ、「生きる力」の育成を適切に図ることができる。

イ 総合科目の履修により、世界史、日本史、地理の各分野について、それぞれの専門性を活かした学習を効果的に進めるとともに、各分野の関連性の理解を容易にすることができる。

ウ 地理歴史科の各科目を再構成することにより、学校や生徒の状況に応じて、共通性と多様性のバランスを配慮した特色ある教育課程を編成することができる。

エ 総合科目の新設により、大学等における地理歴史科教員の養成、高等学校における任命権者による採用に好影響を及ぼすとともに、指導の内容や方法の工夫と改善を通じて学校における人材育成を適切に進めることができる。

(2) 必要となる教育課程の特例

必履修科目としての世界史A（第1学年配置）を教育課程より削除し、新科目「世界の風土と文化」（2単位）を履修させる。また、地理歴史科における必履修科目を「世界の風土と文化」並びに「世界史B」、「日本史B」及び「地理B」のうちの1科目とする。

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

ア 科目の考え方や総合化の在り方

- (ア) 第1学年に必履修科目として設置している世界史Aの代替科目として、2単位の地理歴史科総合科目「世界の風土と文化」を第1学年全クラスで履修させた。
- (イ) 文化を学ぶ視点を重視しながら、地理的な見方、考え方や歴史的思考力を培う学習内容、指導方法を織り込んだ。
- (ウ) 身近な地域から日本、そして世界を大観したうえで、地域固有の地理的・歴史的な特色、重層した異なる地域の関係性、地理的事象の因果関係等を見いだすことができるよう工夫するとともに、地理的な見方、考え方が身に付くよう学習内容に配慮した。
- (エ) グローバルな視点から、「日本」をとらえ、地理的・歴史的な特色について理解が深まるよう配慮した。
- (オ) 人々の生活や文化について、理解と尊厳を持って学ぶ姿勢を培うことができるよう学習内容に留意した。
- (カ) 作業的かつ体験的な学習を重視した。
- (キ) 国や特定の地域について、文化や風土を地理的・歴史的な特色から理解する事例学習を取り入れた。
- (ク) 世界史必履修の教育課程で学んだ生徒に比して、「世界の風土と文化」の履修生徒の地理歴史科の学力が低下しないよう学習内容に十分配慮した。
- (ケ) 中学校社会科の学習成果を踏まえた学習内容を構成するとともに、高等学校で選択する世界史、日本史、地理の学習が一層効果的に進められるよう配慮した。
- (コ) 学習内容が世界史、日本史、地理の3領域の切り貼りにならぬように留意し、ワークシート等を活用して、可能な限り地理的・歴史的な考察が進められるよう配慮した。

イ 各分野の学習の内容や方法

- (ア) 世界史、日本史の領域に関連して、時代と地域を代表させた歴史都市の繁栄を事例として学習するとともに、歴史の転換点となる事象に着目させ、変化を歴史的に捉えることができるよう配慮した。
- (イ) 歴史都市の学習は、生活様式を含めて文化の地域的・歴史的な特色を理解させた。
- (ウ) 世界の歴史都市の学習は、日本の歴史や文化との関係に着目させた。
- (エ) 日本の歴史都市の学習は、東アジアをはじめ世界の影響や関係に気付かせるとともに、日本の伝統や文化との関連や日本の文化の固有性について考察させた。
- (オ) 地図の読図や活用のスキルを習得させるとともに、起こりうる自然災害を地図から想定する学習を展開させた。
- (カ) 世界の風土と文化を学ぶ科目に相応しい地理的事象を精選し、歴史都市学習との関連をも考慮して、いくつかの主題図で世界を大観させた。

(キ) 地域の特色を考えさせ地域性の発見を促す学習を進めた。

(ク) 風土について理解させた。

(ケ) 小地域から国土、世界へと、地域の広がりから学習のプロセスや内容構成を図った。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	総合科目の単元構成等、学習の内容や方法の研究及び先進校への視察
第2年次	年間指導計画の作成及び地理歴史科各科目の再構成の研究
第3年次	指導と評価の一体化を図る観点から評価の具体化に向けた研究

(3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	学習の内容及び方法に関する評価を有識者(運営指導委員)により実施 生徒の意識面に係る評価をアンケート等により実施(年度末)
第2年次	学習の内容及び方法に関する評価を有識者(運営指導委員)により実施 生徒の意識及び学力面に係る評価をアンケート等により実施(年度末) ※国立教育政策研究所作成『平成15年度・17年度高等学校教育課程実施 状況調査』の一部を年次進行に応じて活用
第3年次	総合科目の教育効果について有識者(運営指導委員)による評価を実施 生徒の意識及び学力面に係る評価をアンケート等により実施(年度末) ※国立教育政策研究所作成『平成15年度・17年度高等学校教育課程実施 状況調査』の一部を年次進行に応じて活用 なお、この3年間を通して継続してきた「評価に関する取組」として、 教材研究からの視点も含めて、以下のように整理できる。 ア 関係教員による毎週定例の研究会を持ち、授業の済んだ単元について の生徒の様子を交流するとともに、これから実施する単元の教材や 指導上の課題について、生徒の理解がより深まるように協議する。 イ 教科書執筆者など大学等の研究者(運営指導委員)により、総合科目 の教育効果や教科書作成上の課題等について意見を収集する。 ウ 生徒へのアンケートを実施し、学習への関心・意欲や理解度について 問う。 エ 生徒が取り組み提出した課題等から、新科目履修により培われた表

現力、思考力等について検証する。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

ア 児童・生徒への効果

研究初年度は第1学年5学級のうち2学級のみ導入であったが、2年目3年目は第1学年すべての学級にこの科目を設置した。どの学級でも、興味関心を持って学習活動が進められた。「中学校時に日本の歴史が好きだったが、地理は苦手」「世界各国や都市の位置も地名もほとんど知らない」「世界の歴史はまったく習っていない(覚えていない)ので自信がない」といった生徒も、あまり抵抗感や苦手意識なく学習している様子が窺えた。

また、質問や作業を通して生徒とコミュニケーションがとりやすく、そのことを通じて生徒の理解度や中学校での既習事項・知識の定着度などを把握しやすかった。

昨年度(研究2年目)末の生徒の「意識・関心・意欲」に関するアンケート結果からは、以下のような分析ができた。この分析結果から教員は、励ましをもらったのはもちろんであるが、3年目の実践に活かせるよう努めた。

生徒アンケート 平成22年度末

第1学年 地理歴史科 履修科目別	世界史A 115名	「世風文」 78名
中学校では社会科が好き・得意だった	85名 73.9%	57名 73.1%
高校の学習(世史A・世風文)は、面白い・興味が持てた	80名 69.6%	55名 70.5%
高校の学習(世史A・世風文)興味を持って熱心に学んだ	35名 30.4%	28名 35.9%
世史→「世風文」を学びたかった	28名	44名
「世風文」→学んでよかった	24.3%	56.4%

平成22・23年度末

第1学年「世風文」 履修生 年度別	「世風文」 平22・78名	「世風文」 平23・199名
中学校では社会科が好きで得意だった	57名 73.1%	132名 66.3%
本科目「世風文」は、面白い・興味が持てた	55名 70.5%	144名 72.4%
本科目「世風文」に興味を持って熱心に学んだ	28名 35.9%	69名 34.7%
本科目「世風文」の授業を学んでよかった	44名 56.4%	119名 59.8%

平成22・23年度末

第1学年 履修生の経年変化	平22 第1学年 「世界史A」履修	平22 第1学年 「世風文」履修
平22末アンケート 本科目「世風文」の授業を	学びたかった 24.3%	学んでよかった 56.4%
平23末アンケート 本科目「世風文」の授業を	学びたかった 40.0%	学んでよかった 80.0%

平成23年度末

各項目の肯定的回答率(平23アンケート)	A 2年生	B 3年生
A=平22「世風文」履修 / B=「世風文」未設定		
世界の文化は地理的な要因が大切	97.4%	85.0%
世界の文化は歴史的な経緯が大切	96.1%	86.1%
文化を地理と歴史の両面で学ぶ	89.5%	79.8%
世界の風土と文化はよかった H22	56.4%	...
世界の風土と文化はよかった H23	80.0%	...
世界の風土と文化を学びたかった	...	64.1%

●平成23年度末1年生の回答から

- ・「世界の風土と文化」の授業に関しては、大半の生徒が「面白かった」「興味を持って熱心に学ぶことができた」「有意義に学んだ」と肯定的に評価している。中学生の時から社会科学習が「好き」「得意」と感じていた生徒群では90%近い生徒が「面白い」と感じ、92%を超えて「興味を持って熱心に学んだ」と答えた。この比率は平成22年度第1学年での同様の質問・分析結果よりも高くなっており、授業者がなれてきたことや教材がより練られたことが関係していると思われる。中学校で社会科学習に苦手感を持った生徒群の感触も、前年度に比べて改善傾向が見られるが、こちらの群をより惹き付ける授業を目指さねばならない。
- ・中学生の時から社会科学習が「好き」「得意」と感じていた生徒群では、「このような科目を学んでよかった」と積極的に評価する生徒が70%を超えており、「いいえ」とはっきり否定する6.8%との差は大きい。また、「特に何も思わない」の中にも授業を「面白かった」「興味を持って熱心に取り組んだ」と回答した者が多い。
- ・中学生の時に社会科学習に苦手感を持った生徒群でも、「このような科目を学んでよかった」と積極的に評価する生徒が37%を超え、前年度よりも好反応になっており、「いいえ」とはっきり否定する人数との差が広がっている。

●平成23年度2・3年生の回答から

- ・9割を超える生徒が、「地理歴史科の学習は、語句や数字の暗記だけではない、背景の考察や他地域・他者との関係を探る深い学びが重要である」と考えている。
- ・2年生では約7割、3年生では約8割の生徒が、世界の諸地域や人々の営みについて関心があるが、単なる暗記学習ではなく、学びの「方法知」を身につけたいと考えている。このような考えは、「諸地域のように人や人々の生活にそれほど関心がない」と回答した生徒の中にも多く見受けられる。
- ・約8割の生徒が、自国の文化を他国・他地域との関わりの中で理解すべきと考えている。
- ・8～9割の生徒が、文化の視点から世界や日本の諸地域を学ぶ場合、地理的学習と歴史的学习は密接に関連していて、両面からの学びが重要であると考えている。
- ・全体のまとめとして⇒本校教育課程第2・3学年時の地理選択生徒・歴史選択生徒ともに「地歴科の学習には、地理と歴史の両面からのアプローチが必要であり、単なる暗記ではない“見方・考え方・調べ方”を学ぶべきだ」との指向が強いことがわかる。

●平成23年度2年生の回答から

- ・前年度(1年生)末に同じグループ分けで採ったアンケートとの比較が注目に値する。地理・日本史・世界史の専門領域に分かれて学び、1年経過した時点での回答で「世界史A」履修者の“このような科目を履修したかった”の声と、「世界の風土と文化」履修者の“この科目を学んでよかった”の声の比率が、共に大きく上昇している(前者24%→40%、後者56%→80%)。これは、「社会科の学習には、地理と歴史の両面からの考察が必要である」「専門領域に入る前の基礎的学習として、地理歴史科の総合的科目は有効・適切である」と生徒自身が気づいたことに他ならない。

●平成23年度3年生の回答から(この学年は本研究科目を実施していない)

- ・6割を超える(64.1%)生徒が、本科目のような総合科目に関心を持っており、「学んでみたかった」と答えている。生徒の中には、「1年間にいろいろな種類の勉強をし

ていたようで、面白そうで興味を持った」「地理と歴史を組み合わせる大胆さがいい」などの感想を伝えてくる者もいた。

また、「意識・関心・意欲」の項目に続いて、地理歴史科で培いたい「ものの見方・考え方」や「資料活用」の力を推し量るための「思考・判断」基礎問題も解かせた。基礎問題は8問あり、学年進行で力の推移を見たいことから、全学年全生徒に同一問題を提示した。8問中3問は地理的な分野から、3問は世界史的な分野から、2問は日本史的な分野からの出題である。また、問題の多くは、「国立教育政策研究所 教育課程研究センター『平成15年度 高等学校教育課程実施状況調査』『平成17年度 高等学校教育課程実施状況調査』」を参照したり図表を使って本校で加工したものであるが、次表第8問(日本史～室町文化～)の平成23年度末の正答率が低いことを精査すると、選択肢の設定に難解な面があり、生徒の理解度や定着度を見るにはやや適切さを欠いた出題と思われた。そのため、平成24年度末実施の調査では、選択肢の文言を作り変えたので、正答率が上昇した。

全学年 平成23・24年度末アンケート共通基礎問題 集計と分析

基礎問題・質問番号		平成23年度末				24年度末
		1年生	2年生		3年生	1年生
		全員「世風文」履修者 計199名	世界史A履修者 計105名	世界風土文化履修者 計76名	全員「世風文」未履修 計159名 ※注	全員「世風文」履修者 計194名
地 図法	正答率	55.3%	48.6%	67.1%	52.2%	54.1%
地 住居	正答率	45.7%	38.1%	44.7%	32.1%	42.7%
地 地体構造	正答率	29.6%	37.1%	44.7%	37.1%	37.4%
世 時代順	正答率	37.7%	31.4%	40.8%	32.1%	34.7%
世 8C.	正答率	19.1%	35.2%	32.9%	23.9%	19.6%
世 三角貿易	正答率	30.7%	23.8%	67.1%	36.5%	40.8%
日 文字	正答率	59.8%	66.7%	67.1%	46.5%	49.7%
日 室町	正答率	38.7%	23.8%	28.9%	26.4%	54.8%

※注 この学年(3年生)にアンケートを実施したのは、学年末考査が終了して各地で大学入試が実施されている2月の登校日であり、入試のために登校していない生徒が多かったので在籍者数200名のうち159名分しか採取できなかった。

分析

- 平成23年度2年生で、その前年度に『世界の風土と文化』を履修した生徒たちの正答率は、本科目を履修していない他生徒群(①3年生 ②前年度『世界史』を履修した2年生)に比べて、全体的に高い傾向が見られる。
- 上記と同様に、平成23年度で履修者群と他群を比べた場合、前者の正答率が際だって高い上表第6問(世界史～三角貿易～)については、その前年度の「世界の歴史都市ニューオーリンズ」での学習事項がよく理解され定着した結果であると思われる。
- 上表第2問(地理～住居～)の解答で、第2・3学年時の地理選択生徒の中でも正答率が低いのは、「遊牧民の住居」という選択を考える以上に「アラビア半島」の語句から

「乾燥地」の印象に引きずられ、日干しレンガを選んだ生徒が多かったことが原因であると思われる。

分析のための材料は多くはないが、本科目の履修で、地理歴史科に関する「意識・関心・意欲」のみならず「学力」面を伸ばすことも十分果たせると考えている。

平成22～24年度 第1学年全学級のアンケート結果（5学級）

		平成22年度第1学年 計193名		平成23年度第1学年 計199名	平成24年度第1学年 計194名
		世界史A履修計115名	世界の風土と文化計78名		
中学校と比べて	A難しいが、面白い	面白い70%	面白い71%	面白い72%	面白い58%
	B難しいから面白くない	24%	21%	17%	36%
	C難しくないが、面白い				
	D難しくも面白くもない	6%	9%	11%	6%
自分の変化	A興味を持って熱心に	30%	36%	35%	21%
	B興味関心に変化なし	63%	55%	53%	65%
	C興味を持てなかった	6%	9%	12%	14%
高校で伸びた力	A調べてまとめる力	23%	21%	33%	15%
	Bよく考え主張を持つ力	11%	17%	17%	17%
	Cもっと勉強したい意欲	23%	24%	17%	14%
	D地名・人名など知識量	68%	58%	48%	67%
この科目を	学んでよかった	24%	56%	60%	55%
	いいえ	16%	5%	9%	7%
	とくに何も思わない	60%	37%	31%	38%

分析

- ・研究初年度の第1学年の授業に関しては、「世界史A」「世界の風土と文化」とともに、大半の生徒が「有意義に学んだ」と肯定的に評価しており、両者に大きな差は見られない。正規の教科書のない中で試行された授業「世界の風土と文化」が、比較的抵抗なく受け入れられている、と見ることができる。また、「世界の風土と文化」を学んだグループでは、「このような科目を学んでよかった」と積極評価する生徒が56%おり、「よくなかった」とはっきり否定する5%との差は大きい。この大きな差は、3年間継続している。
- ・2年目の第1学年「世界の風土と文化」の授業に関しても、大半の生徒が肯定的に評価している。
- ・3年目の第1学年は、授業担当者の違いや学習に向かう姿勢についての学級間の差が影響し、生徒による授業評価や印象の回答が学級によって大きく開いており、学年全体の平均値では高評価や好印象が10ポイント以上下がってしまった。本科目がさまざまな課程の高校に普及することを願って研究を続けていたことを考えると、このような実態から我々が学ぶべきことも少なくないだろう。
- ・また、回答を中学校の「社会科」授業の印象別に処理した場合(2年次)、中学校時から社会科学学習が「好き」「得意」と感じていた生徒群では、3年間を通じて、9割前後の生徒が

本授業を「面白い」と感じ、「興味を持って熱心に学んだ」と答えた。そして6～7割の生徒が「このような科目を学んでよかった」と積極評価している。中学校で社会科学習に苦手感を持ってしまった生徒群の感触も、好印象が初年度の3割から2・3年目の4割へ、と改善傾向が見られた。

イ 教師への効果

地理・日本史・世界史の各領域を専門とする教員4名で毎週教材研究会を持ち、授業資料を作成し、学級別に授業を担当した。教材研究は小単元毎に担当を割り振った。世界の地形や気候を大観する小単元は地理の教員が、「世界の歴史都市」の中でも「平城京(奈良)」や「京都」など日本を代表する歴史都市は日本史の教員が受け持つ、というように、基本的には各自が専門分野と関連の深い単元を受け持つことが多かったが、担当者が提案する教材や指導案は全員で練り直し、何度も訂正・改良しては完成版を作っていくので、他領域ならではの発想からの助言が教材をよりよいものに仕上げてくれることもしばしばだった。また中心教材の「世界の歴史都市」は、3年間で約15都市の教材蓄積を進めるために、地理や日本史の教員も4～5都市は教材提案を担当した。その際、世界史の教員からの助言を積極的に求めた。

このような分業・協業体制の中で、3領域の境界を越えて地理歴史科のねらいや指導方法等について議論を重ねることができ、教員の教科指導力の向上につながった。換言すれば、この科目を生徒に理解させるための教材研究や準備が、教員自身が今まで専門としてきた科目の教授法を多角的に見直すきっかけとなり、新しい教授法の開拓に繋がったといえる。

教員自身にとっても、向学心が湧く科目である。

ウ 保護者等への効果

この3年の研究期間では、多くの保護者や地域住民が、学校公開や学校説明会、そして本校のホームページから本研究開発が進行していたことを知っており、PTA役員の会議などさまざまな機会に質問や期待の声が出ていた。また、「子どもがこの科目を楽しみにしている」という声を届けてくれた保護者もいる。

また、HPを見たとのことで『長岡京市環境の都づくり会議』（長岡京市が後援する研究団体）から授業の取組について市民に広報してほしい、との要請があったので、「郷土の環境や文化に関心の高い生徒を育てるために～地理と歴史の融合を図る新科目の挑戦と、京都が育んだ伝統文化『生け花』の体験授業から～」といった内容で授業の一端を報告した。これは、平成24年1月19日に長岡京市立中央公民館での『第59回 環境教育ミーティング』として開催され、様々な年齢・職種の市民の参加があった。

これらをとおして言えることは、本校の一連の取組が、高等学校の地理歴史科の科目構成や現場での今日的課題について保護者や一般の方々が関心を持つ契機となったものと思われるということである。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

ア 学習指導と教科の特性

(ア) 地理歴史科の総合科目を創設するといえば「地理・日本史・世界史」の3領域の切り貼りのように捉えられがちだが、本研究が目指すものは「3領域の切り貼りではない、新たな学習意欲や発想を育てる科目」の構築である。その実現のためには、地理歴史科の「基礎基本」を整理した上で総合科目としての本科目の「学習のねらい」を明確化することが必須であるが、議論を重ねても、地歴科の「基礎基本」を3領域の教員が理解できるような項目で、しかもコンパクトな紙面構成でまとめることはなかなか困難だった。3領域を並列的に捉えたり、三角形の3頂点とイメージすると、大胆な発想転換は生まれにくい。車輪と車軸、の発想で考えてみるとどうか。日本史・世界史が両側の車輪で、両者を繋ぐ軸が地理である、と。「地理」は、両輪の「歴史」を支えて、両者の仲立ちもできる。日本史と世界史を結びつけながら、比較の視点を提供できる。両輪をうまく動かすために、地理をツールとして使う。この捉え方でいくと、ある種の普遍性が見つけられるのではないか。

今後も、「基礎基本」を踏まえた3領域相互の普遍的な関わり方の考察は続けなければならない。

(イ) 本校が提示したのは、地理歴史科で何を必修修にすべきか、の議論ではない。すべて学ぶべきだ、との立場である。3領域の内容を網羅したものを学ぶことが当然無理なら、地理・歴史両者の「学び方」を身に付けさせる方向を模索すべきである。2単位で、3領域すべてが満足いく完全なものを狙うのではない。科目を貫くストーリー性を重視したい。

(ウ) 本科目が扱う内容について、「日本史領域が少ないのでは」という声がある。奈良・京都を取り上げるにしても、いつの時代を扱うかでねらいや広がりが変わる。例えば、江戸は取り上げるのか、それを東京として扱うか、なども一考の余地がある。また、「世界の歴史都市」の一環として日本の都市を取り上げながら、日本の通史的な歴史も文化も概観できる工夫を施す、という点は忘れないようにしたい。

また、研究発表での協議会や運営指導委員会での論議の中から、「『他国の都市の歴史や風土を見ながら、地理的思考に助けられて、実は日本をも見ている』『さまざまな時代を眺めながら、日本の現代を考察することにもなる』といった捉え方もできるのではないか、そのように言える授業を目指さねばならないのでは」という指摘があり、大切な“気づき”の視点を与えられた。

さらに、研究3年目から導入した【「歴史都市」学習を繋ぐ「世界商品」的な「モノ」を扱うトピック学習】で、日本史領域の内容に触れることもできると考えている。

(エ) 学習を通して身に付けたものは、生きている現在に繋がるのが欠かせない。アンケートでも、生徒たちは暗記学習だけではないことを期待していることが窺えた。学習には、学んだことを現在に生かせる段階が必要である。

イ 評価

(ア) 研究活動及び教育活動に対して、客観的なエビデンスを提示すべく評価体制を整備する必要がある。

(イ) 総合科目の履修の有無が学力形成に与える影響について、評価する手法を研究開発する必要がある。

(ウ) 昨年度の内容を見直した単元もあるので、改めて各単元及び項目の目標を明確にし、わかりやすい評価規準を定めて指導と評価の一体化をさらに進める必要がある。

上記(ア)～(ウ)について、部分的に検証し得たところもあるが、教材作成や指導法の練り直しに多大な時間を要し、不十分なままになっている。

ウ 中高及び高大の接続

- (ア) 中学校における新学習指導要領の実施を踏まえ、中学校社会科での学習内容を整理し、高等学校地理歴史科で身に付けるべき学力を明確にする必要がある。
- (イ) 地理歴史科の必履修科目として、上級学校への進学に求められる学力を明確にし、高大接続を円滑に図ることが求められる。

エ 人的資源と予算的措置

- (ア) 研究を円滑に推進するため、指導と研究に資する十分な人材及び時間の確保が困難である。
- (イ) 本校では、効果的な学習活動を支援するICT機器や図書、教材等の整備が不十分であった。このような研究開発の成果を上げるためには、新たな予算的措置が必要であると思われる。

オ 全体として ―研究指定を終えるにあたって―

本校では3年間の研究に終止符を打つことになるが、本研究で得られた教授法・教材などさまざまな成果や地理歴史科教員としての意識改革面は、今後の地理歴史科各科目の授業にも役立つと確信している。既存科目での授業に（全体または部分的に）生かせるワークシートが少なくないので大いに活用したい。

また、同様の視点を持った研究開発校があれば、できる限りの協力を惜しまない。本研究は地理歴史科総合科目の創設における一つの考え方を提示したわけだが、さらに内容を深め、課題を解決していく必要があるだろう。その上で、学習指導要領の次期改訂に資することになれば、生徒たちにとって地理や歴史を学ぶ有効な方法となりうるものであるとの確信を得た3年間であった。